



A.軍事教育が垣間見えるカルタ／B.戦時中のランドセル。つぎはぎだらけで厚みがない／C.尋常小学校の教科書(以上、豊村富司さん提供)／D.24歳頃の白澤さん／E.戦友との写真(以上、白澤力男さん提供)／F・G.戦地の父から届いた手紙。家族を思いやる言葉があふれる(及川恭一さん提供)

証言 Episode 3

私たちの戦争

戦争の犠牲者は、戦死者だけではなく。戦争一色の生活は、それぞれの自由を奪いました。生活、青春、教育一。すべてを捧げ、奪ったのが戦争です。あの時代を生きた人、全員が犠牲者でした。

祖父は死亡し、自宅は全焼 戦争に人生を変えられた



小山甲太郎さん 室根町折壁・79歳



当時の蔵の屋根板。直径6号ほどの機銃掃射の跡が残っている

忘れもしない8月9日午前11時45分。気仙沼方面からグラマン機が飛来しました。列車を狙った機銃掃射が、自宅を直撃。家の中に、すすと火花が降り注ぎました。家が燃えて庭に飛び出すと、真っ赤な血だまりの中に祖父が倒れていました。左肩から右肩へ弾が貫通していました。私も、足に被弾し、今も傷が残っています。あの日のことは、忘れようとしても忘れられません。戦後、すぐに働かなければならず、進学を諦めました。戦争は私から、祖父、家、夢を奪いました。

それぞれの悲劇

戦争の犠牲者は、戦地に出兵し、帰らぬ人になった将兵や空襲で命を落とした人たちだけではありませんでした。

学徒動員により、男性は出兵。日本に残された女性、老人や幼児は、自給自足の生活を強いられました。農家のコメは集められ、完全配給制に。少しのコメに、麦、アワ、イモやダイコンなどを混ぜた「かてごはん」を食べました。配給は足りず、サツマイモのツタまで食材にしなければなりません。戦局の悪化につれて、学生や生徒らは、国内の労働力不足を補うため、軍需工場や食糧の増産に動員されました。また、満25歳未満の女子は女子挺身隊と呼ばれる「女子勤労動員組織」へ。1年間の勤労奉仕を義務づけられました。

本土空襲が本格化すると、アメリカ軍による空襲や機銃掃射におびえる日々が始まりました。空襲警報が鳴るたびに「死」が脳裏をよぎる毎日が続きます。国外で戦った生存者の中には、敗戦後、何年にもわたって過酷な抑留生活を強いられた人もいました。強制労働は体力を奪い、不衛生な環境での生活は伝染病をまん延させました。母国の土を踏む日まで、彼らの戦いは続きました。戦争一色の生活は、ありとあらゆる自由を奪いました。国民は、食べたいものは食べられず、必要なものは手に入らない生活を余儀なくされたのです。10代・20代の若者は、青春時代を奪われました。子供たちは、十分な栄養を取れず、必要な教育を受けられませんでした。

50年越しに知った愛 思い出なき父からの手紙

小野寺ヨシ子さん 山目・71歳



私が生まれてすぐに、硫黄島へ出兵した父。父の記憶はありません。遺骨の代わりに届けられたのは、石ころ一つでした。戦後、母が家業の農業を継ぎました。朝から晩まで、畑や田んぼ仕事の毎日。母を見かねて、しゅうとは再婚を勧めたそうです。私が3歳の時、母は再婚。二番目の父は、私にたくさん愛情をくれました。私もすぐに父を受け入れましたが、学校で「父親がちがう」といじめに。幼心に家族には相談できないと、一人泣いたことを覚えています。家庭では、戦死した父の話をすることはありませんでした。

母が他界する間際に、戦死した父からの手紙を受け取りました。長い間、大切にしまわれていた手紙には、繰り返し体の弱い私を気遣う言葉が。「父の愛情」を、50年越しに感じました。父の面影を探して、1996年に硫黄島へ。父が亡くなった砲台を訪れ、短歌を詠みました。「硫黄島父の守りし大砲は赤く錆びつき西側を向く」。最愛の妻と子二人を残し、この世を去った父の気持ちを考えると涙が止まりません。

1999年、アメリカから写真が届きました。父が出征するときの写真でした。戦争当時、アメリカ兵だった人が亡くなり、その遺品の中にあつたそうです。運よく届けられた写真。遺骨もない父の「家族のもとに帰りたい」という思いが、写真を届けてくれたように感じてなりません。



アメリカから届いた写真。裏には、父・佐藤忠志さん直筆の住所が書いてある

シベリア抑留から帰還した父

父は、昭和23年頃にシベリア抑留から帰還しました。シベリアといえば、飢えや寒さと戦いながら重労働が行われた場所。父も、多くの戦友を亡くしたのでしょう。戦争の話をしたがりませんでした。叔父は、フィリピンで戦死。当時23歳、戦争は若者の未来を奪いました。



岩瀬甚吉さん 花泉町金沢・73歳

「お父さん」悔しくて声が出なかった

父と叔父2人が戦死。父の遺骨は戻らず、出兵前に残した爪と髪の毛が遺骨代わりです。2003年、父が戦死したフィリピン・ルソン島へ。「お父さん」。呼びかけたいのに、声が出ませんでした。どうして父が死ななければならなかったのか。戦争が残した悲しみは、今も消えません。



小野寺雄治さん 川崎町薄衣・77歳

「戦友を弔い、忘れない」生きて帰った私の使命

1943年3月、内地での勤務を命じられて弘前師団へ。憧れた兵士の世界は、厳しくつらいものでした。玉音放送を聞き、知った敗戦。悲しみよりも「やっと終わった」という安堵が強かったです。地元に戻ると、同級生の約半分が戦死していました。戦友や遺族を思うと、帰還を喜べませんでした。

生き残った私に何ができるか。そこで、お盆の「摺沢水晶あんどん祭り」を考察しました。終戦から70年。「卒寿坂 生きながらえて一人旅 今は亡き戦友 哀愁侘し」。こんな思いは、誰にもしてほしくない。



白澤力男さん 大東町摺沢・93歳



級友との集合写真。皆他界し、今は白澤さんだけが残る

戦地から届く家族愛 遺品は父からの手紙だけ

及川恭一さん 室根町矢越・83歳

父は29歳で戦地へ。当時、最強の機甲部隊といわれたフィリピン・ルソン島の部隊に配属されました。父は、写真付きで現地の様子が分かる手紙やはがきを送ってくれました。手紙には妻や私たちを励ます言葉がずらり。本人が一番大変だったはずなのに、いつだって家族への気遣いを忘れませんでした。

父は、1945年6月に戦死。翌年、遺骨の代わりに木の札が一枚届きました。遺品は、現地から送られた手紙だけ。家族は、父の死に実感を持ってませんでした。

父の戦死後も、母は気丈に振る舞いました。しかし、稼ぎ手のいなくなったわが家。母は、子育て、曾祖母の介護、家業の農家、家事などに追われました。母は「人に手伝わってもらなら、自分はその二倍働きなさい」と言って、一生懸命働きました。一家を支えたのは、夫を亡くし、誰よりもつらい母でした。

しばらくして「父の最後を話したい」という人から手紙が届きましたが、母は拒否。遺骨も形見もなく「もしかしたらー」という思いを、断ち切れなかったのでしょう。違う人からは、父の最後が書かれた手記が。慰霊巡拝へ行く際に、やっと読む決心がつかしました。手記をいただいてから10年後のことです。涙が止まりませんでした。



④出征前の家族写真／⑤戦地からの手紙。「会えなくても寂しくない」と家族を励ます



戦時中を生き抜いた人たちは、戦争にすべてを捧げ、戦争にすべてを奪われました。一人一人に悲劇が起こり、消えない痛みを抱えて生きてきたのです。